

昭和初期の俱楽部建築における家具の様相

—綿業会館を事例に—

はじめに 綿業会館は、昭和6年（1931）に竣工した俱楽部建築である。設計は渡辺節（渡辺建築事務所）、施工は清水組（現、清水建設）。日本における様式建築の到達点のひとつであるとともに、合理的な設計思想に支えられ、昭和初期のオフィスビルの特徴も有する。2003年には重要文化財の指定を受けた。

奈文研では、2018、2019年度にかけて綿業会館の保存活用計画策定の委託をうけ、調査研究をすすめた。調査の中では、建物履歴をあきらかにするために、日本綿業俱楽部所蔵図面の調査を実施した。所蔵図面は総数167点において、竣工後の修理・改修図面のみならず、設計当初に作成された図面も多く確認した。また、家具に関する図面も複数点確認でき、これまで言及されることが殆どなかった綿業会館の家具について、その様相を知る機会を得た。そこで本稿では、調査によって確認した家具関連図面の内容および当初家具の遺存状況を報告し、綿業会館における家具の特性について考察する。

家具関連図面の種別 所蔵図面のうち、家具関連図面は13点確認した。そのうち設計当初に作成されたとみられる図面は、図面K-01『綿業家具配置図』内家具配置図（旧）、図面K-02『綿業会館家具設計図』、図面K-03『無題（家具設計図・配置図）』の3点である。K-01は、A2横使い、青焼き21枚、トレーシングペーパー1枚の非綴図面。一部図面に渡辺建築事務所の図面枠を用い、作図日を「1931.12.1」と記す。図面のうち15枚は各室毎に家具をプロットした家具配置図であり、地下1階～3階、6階に位置する18室の家具種別・配置がわかる。また、図面上には、朱で発注先とみられる業者名が追記される。

K-02は、A3横使い、青焼き、表紙付き計29枚の図面綴。作図者、作図日の記載はないがその内容から渡辺建築事務所が設計時に作成した図面とみられる。1～3階の12室の家具について、主に正面図・側面図が描かれ、一部平面図と配置図も載る。細部意匠まで描き込まれるも、寸法の記載は外形など最低限であり、各家具のイメージを伝えるための図面とみられる。椅子、卓子、飾棚など60種類の家具形状がここから把握できる。

K-03は、A2横使い、青焼き、非綴5枚の図面である。

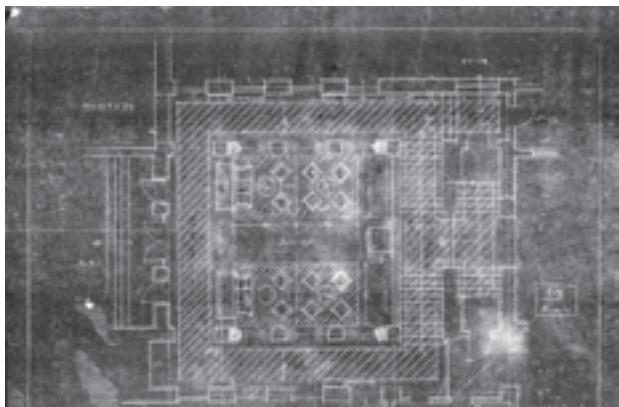


図36 図面K-01「綿業家具配置図」内家具配置図（旧）「壱階ホール」
作図者、作図日の記載はないが、一部図面の右下に「藤原木工」と記され、藤原木工が設計時に作図したものとみられる。1階2室、階不明2室の家具の配置図・正面図・側面図が描かれる。14種類の家具形状がわかる。

設計当初以外の家具関連図面の大半は、戦後米軍に接収された後、昭和27年（1952）の接収解除の際に、再入居のために検討・作図されたものである。家具修理仕様、各室の家具プロット図、家具形状を示す外形のスケッチ等の図面が収められる。

当初家具の遺存状況 次に当初家具の遺存状況についてみてみたい。貸室や倉庫等を除いた各室の家具を調査した結果、44種類の当初家具が遺存していることがわかった。部屋別の内訳では、1階ホールが7種、会員食堂が2種、談話室が4種、2階会議室が5種、貴賓室が8種、談話室が15種、1号室および地下1階グリル、5号室がそれぞれ1種となる。当初より重要諸室として設計された1階ホール、2階談話室、貴賓室では、当初配置されたすべての家具が遺存していることがわかった。また、当初とは異なる室に移動して使用されている家具も数点あった。椅子、ソファの多くが上張りの張替え、座面の補修をおこなっているも、遺存状況は良好である。家具には座裏等に真鍮製のラベルが釘打ちされ、A～Cの頭記号に通し番号が振られる。同一種類の家具にも異なる番号が付けられる。

家具のデザインは室毎に異なる。1階ホールの家具は全体的に装飾が抑えられ、卓子には渦巻に彫刻されたカルトゥーシュ形の脚板をいれる等、イタリアルネッサンスの室内装飾との調和が図られる。2階談話室はジャコビアン様式の室内に合わせ、卓子の脚にメロンバルブや挽物を使い、全体的に重厚な雰囲気で作られる。ジャコビアンに典型的なシュガーツイストは全く使わず、落ち着きがある。2階貴賓室の家具はマホガニー風の塗装がほどこされ、卓子、椅子ともすべてカブリオールレッグをもち、曲線を多用した軽やかな形状がクイーンアン様式の雰囲気をよく表す。フランスバロック風の足元の貫が

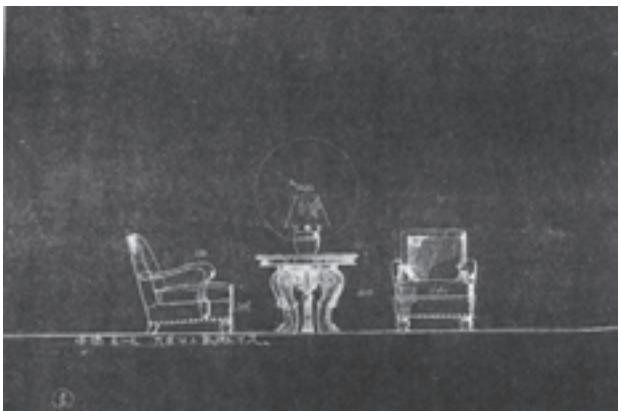


図37 図面K-02「綿業会館家具設計図」「①1階ホール 丸卓子と肘掛イス」
独創的である。

家具製作者 先述したように、K-01には各家具の配置図上にその発注先となる家具業者名が朱書きされており、図面には「大林」、「藤原」、「清水製作所」、「高島屋」、「藤井」の5社の記載を確認できる。「大林」は、大阪を中心内装・家具製作分野で定評を得ていた大林組工作所とみられる。「藤原」はK-03に記載があった藤原本工とみられるが、会社詳細は不明である。「清水製作所」は合資会社大阪清水製作所、「高島屋」は高島屋家具装館部とみられ、ともに室内装飾、家具製作において当時名を馳せた会社である。「藤井」は詳細不明である。

各会社の家具種別をみると、大林組は1階ホール、談話室の家具一式、清水製作所は2階貴賓室、会議室の家具を担当する。藤原本工は1階会員食堂、2、3階食堂、小食堂のテーブルを、高島屋は地下1階の休憩室家具一式、食堂のテーブルを、藤井は6階大会場の家具一式を担当する。加えて、K-03からは藤原本工が1階荷物預所内の格納箱等の収納家具を担当していることがわかる。これより、高い意匠性が求められる室の家具を大林組と清水製作所が担い、高島屋は綿業会館において唯一モダンな設えをもつ地下諸室の家具を担当し、藤原本工はテーブルや収納家具など実用性が求められる家具を担っていたことがわかる。K-01には、1階会員食堂の椅子に「注文モノ」との記載も確認でき、既製家具を納入した部分も多くあったと推測される。

昭和初期の家具の位置づけ 大林組、清水製作所の作製した家具は意匠、品質ともにレベルが高く、特に清水製作所による2階貴賓室の家具はその中でも傑出した出来である。清水製作所は、ドイツで家具室内装飾を学んだ清水米吉により明治40年(1907)に設立された家具製作所である。三井本館をはじめ三井家関係の建築の家具をほとんど手掛けるなど、様式家具製作の分野においては当時屈指の会社であった。綿業会館において最重要ともいえる貴賓室の家具製作に清水製作所が選ばれたことは当然ともいえよう。

表6 遺存当初家具一覧

階数	室名	家具種別	製作所	記載 図面	竣工写真 有無	ラベル 番号
1F	ホール	肘掛け椅子	大林組	K-02	○	札取れ
1F	ホール	丸卓子	大林組	K-02	○	A-5
1F	ホール	長椅子	大林組	K-02	○	
1F	ホール	長卓子	大林組	K-02	○	A-3, 4
1F	ホール	植木台	大林組	K-02	○	
1F	ホール	腰掛け	大林組	K-02	○	
1F	ホール	衝立			○	
1F	会員食堂	飾時計			○	
1F	会員食堂	衝立	(藤原本工カ)	K-03	○	
1F	会員食堂	テーブル				C-149
1F	談話室	安楽椅子	大林組	K-02	○	A-21
1F	談話室	長椅子1	大林組		○	
1F	談話室	長椅子2	大林組	K-02		
1F	談話室	丸卓子	(藤原本工カ)	K-03		
2F	会議室	テーブル	清水製作所	S27	○	B-101他
2F	会議室	肘掛け椅子	清水製作所			B-106他
2F	会議室	安楽椅子	清水製作所	S27		
2F	会議室	花台	清水製作所		○	B-136他
2F	会議室	サイドボード				K-02
2F	貴賓室	長机	清水製作所		○	B-81
2F	貴賓室	長卓子	清水製作所		○	B-90
2F	貴賓室	壁付机	清水製作所		○	B-91
2F	貴賓室	肘掛け椅子2	清水製作所		○	B-92
2F	貴賓室	卓子1	清水製作所		○	B-94
2F	貴賓室	花台	清水製作所		○	B-93
2F	貴賓室	肘掛け椅子	清水製作所		○	B-82他
2F	貴賓室	椅子	清水製作所		○	B-86
2F	談話室	長卓子		K-02	○	B-1他
2F	談話室	肘掛け椅子		K-02	○	A-78他
2F	談話室	長卓子2				B-4
2F	談話室	背付長椅子		S27		B-5, 6
2F	談話室	円卓子	K-02	○		B-11他
2F	談話室	長椅子	K-02	○		
2F	談話室	飾肘掛け椅子	K-02	○		B-28
2F	談話室	飾棚	K-02	○		B-44
2F	談話室	書記机		S27		B-47
2F	談話室	書記椅子				C-64
2F	談話室	安楽椅子		K-02	○	札取れ
2F	談話室	円卓子2				札取れ
2F	談話室	肘掛け椅子		K-02	○	札取れ
2F	談話室	チェスト		K-02		
2F	談話室	茶卓子	K-02	○		C-53
2F	1号室	壁付卓子	K-02			
B1F	グリル	サービス卓子		S27		
B1F	5号室	サイドボード		K-02	○	B-269

※記載図面のうちS27は昭和27年作成図面を示す

しかし、清水製作所は昭和7、8年(1932、1933)を最盛期として昭和11年(1936)には廃業に至る。これは、百貨店などの大資本が家具や室内装飾の分野に広く進出したことが影響するいっぽう、清水製作所が得意とした様式家具の需要のピークが過ぎたことにもよる。すなわち、建築そのものが様式建築から装飾を排したモダニズム建築へと移行していく間であり、その内部の家具も同様の変化が求められたのである。清水製作所に限らず、様式家具を製作していた多くの注文家具商がこの時期廃業に追い込まれたという。綿業会館に残された家具は、廃業直前のまさに最盛期に作られた家具として貴重であり、綿業会館が様式建築の到達点であるのと同様に、日本における様式家具の到達点のひとつとして位置づけられる。

(前川 歩)

参考文献

俵元昭『芝家具の百年史』東京芝家具商工業協同組合、1966。